# 福島の痛みを希望に変える医療者・改革者・リーダー

## ドクターの肖像 191

# 菊地臣一

公立大学法人 福島県立医科大学 理事長・学長
ふくしま国際医療科学センター長

聞き手／中村明（〈株〉メディカル・プリンシプル社 社長）
文／郷好文　撮影／稲垣純也

## 3・11では自ら陣頭指揮 水700本を八王子から運ぶ

「シャンデリアが落ちたのです」

福島医科大学理事長の菊地臣一氏に東日本大震災当日のことを聞いた。

「3月11日。その日はホテルオークラ東京で、翌日から開かれる国際会議のウエルカムパーティーを開く予定でした。世界的な脊椎外科研究者を招いての国際会議でしたが、交通機関は止まり、病院に連絡すると福島の被害は甚大でした。会議の継続は無理との空気が広がった午後4時ごろ、道路を挟んだ向かいにある米国大使館から人が来たのです」

大使館からの知らせは、翌朝一番の航空機の座席を用意しましたから待避してくださいというものだった。しかも2人の米国人の分だけでなく、欧州などからの研究者9人の分も用意されていた。11日午後の時点で、福島第一原発から50マイル(約80㎞)圏内にいる米国人には既に退避勧告が出ていた。会議のホストを務めていた菊地氏は、翌朝早く研究者達を成田空港まで一般道を使い2時間30分掛けて送り出した。

岩盤上に立つ大学の建物には目立った被害はなく、水道は止まったが、停電にはならなかった。だが入院患者や帰宅できない患者が附属病院内に残されてしまった。すぐに外来をストップさせ、あらゆるスペースに可能な限り避難者を収容するという段取りを、福島に残っていた病院の幹部で対応した。778床の病院が約1000人を収容することになった。ただ、問題は水の確保だった。

「病院は1ベッド当たり1日に1トンの水が必要と言われていますので、1日に700トン以上の水が要ります。すぐに手に入れられる水は八王子まで行かなければ確保できなかったため、なんとか2リットル入りのペットボトル700本を集め、6時間半かけて、一般道で大学に戻りました」

自衛隊の水補給車では賄えきれず、26日12時までに水道が復旧されなければ、会津に診療機能を移すことを内々に決定していた。幸い水道は18日、撤退を決める1時間前に復旧した。ところが、福島第1原発の事故で、放射線漏れによる健康被害の懸念から医療現場の崩壊さえも予想された。

「国際会議のある出席者から、『一緒に米国に行こう。いつまでいてもいいから』と言われました。そんなことできるわけがないのに」

## 溢れる闘志と抜群の心配り それらを両立させる指導者

戦う男である。地震発生の日から陣頭指揮に立ち、福島の医療の総崩れに立ちはだかったリーダーである。反骨精神を培ってきた強烈な個性の持ち主。愚直に努力を重ねた腰痛分野の世界的権威。医局員のマナーを叱咤し厳しく正す教育者でもある。だが戦う一方ではない。理事長室では香の優しい香りと週替わりの季節の花が来客を迎える。香は京都の老舗から、花は理事長自らが花卉を選んだ上でのプロのアレンジ。珈琲カードの心配りも。

「特別に急いでやってもらった時などに、スタッフへ感謝の手紙に添えて渡します」

闘志と気配りを奇跡のように両立させる男。地位や年齢と共に求められるものを磨き、自己から患者へ、医療者から地域へと、スケールアップする痛みと戦ってきた。痛みをめぐる探究をたどっていこう。

## 父の理不尽な後ろ姿を見て「正義」と「医師」を意識する

菊地少年は、ペダルを漕ぐ父の黒い自転車の四角い荷台に跨っていた。父の背中と少年の胸の間には一升びんの日本酒があった。着いた先はぐるりと塀が周るほどの大邸宅。父は玄関先で頭を深く下げた。

「そこは整形外科医の家でした。なぜ父が謝るのか不条理を感じました」

父は戦後、公職追放になり、代々柔術師範でもあった家業を継ぎ接骨院を営んでいた。ある日、腕の骨を折った患者が父の元を訪れた。患者は最初に行った整形外科で手術が必要という診断に疑問を持ち来院していた。

「そこは球関節だからつながりさえすればいい。海綿骨が多い部位だからすぐにつながると考え、父は手術が不要と診断した。

今から考えると、上腕骨の外科頸部骨折だったのでしょう。患部固定・手術不要という処置が広まる以前のことでした。父は柔道整復師でしたが、独語の医学書を読む人でしたから、見立てにサイエンスがありました」



# 背骨の内側から見える感覚を獲得してから 手術時間が抜群に短くなりました

ところが手術せずに治ることを喜んだ患者は、勢い余って最初にかかった整形外科医の元に行き、「このへぼ医者、手術しなくていいじゃないか!」と言い放ったという。怒り心頭に発したその整形外科医は父に電話を掛け、「医者でもないのに、骨接ぎの分際で何を言うのか!」と怒鳴り散らした。

なぜ同じ人間なのに横柄に振る舞えるのか。職業に貴賤があるのか。いつかその決着をつける――小学5年の菊地少年は、「正義」に関する職業と「医師」を意識し始めた。

## 福島医大を補欠で合格 「医大に行くならカネを出す」

福島県石川町で医療の世界と隣り合わせに育った菊地少年だが、決着をつける職業として、法の番人である検事の道を選ぼうとした。

「私立と国立の法学部を受験して合格しました。当時、一期校と二期校の間に試験が設けられていた福島医大は親孝行のつもりで受けただけで、しかも補欠でした。父は言ったんです。『医大に行くならカネを出すが、それ以外は自分で稼いで行け』と」

父は「時代に左右されない職業を選べ」とも言った。

「時代」とは何だったのか。戦後の公職追放という憂き目と、医師と接骨師という職業の貴賤であった。子は渋々と医大に進学したと語ったが、そこには「決着をつける」思いもあった。父と子の心がその時、交錯した。

福島医科大学に進学すると、大学紛争真っ盛りである。青年医師連合という左翼活動家の自治会が整形外科教室を仕切っていた。

## 医局から除名され トランク一つで地方回り

「自治会は医局の解体、学位ボイコット、教授職は悪だと叫んでいました。医学は教科書と図書館だけでは学べない、徒弟制度も必要である、という私の主張はまるで通じませんでした。当時働いていた日赤医療センターから、整形外科ではなく解剖の講座に学位を申請し取得しました。その結果、医局から除名されたんです」

菊地氏が書いたカルテは破られ、医局カンファレンスにも参加できず、飲み会にも呼ばれなくなった。指導医がいない研修先ばかりを回されるようになる。奇しくも父と同様に、主流から罵倒される憂き目に遭った。

「トランク一つで地方回りですから、お金は貯まりました。6年間は頑張って、それから開業しようと思ってました」

## 医師からメスと薬を取って 残るものが力量

だが憤怒で灯火を燃やしていた矢先、父が急逝する。亡くなる1週間前、父は息子を呼びつけてこう言った。「医師からメスと薬を取ったら何が残る。残ったものがその人間の力量だからな」

子はあの日の自転車を思い出す。父にはメスが無くても確かな見立てがあった。では自分には何が残るのかと思いを馳せた。

医局に絶望し、開業して父を喜ばせる夢も絶たれた。途方に暮れたとき、3つの論文と出会った。

## 〝心眼〟の師を求めて いざカナダへ私費留学

世界的な脊椎外科医、Ian Macnab教授の3つの論文〝Traction Spurs〟と〝Blood Supply of the Lumbar Spine and its application to the technique of spinal fusions〟、〝Negative Disc Explorations〟である（いずれもJ Bone Joint Surg.1971）。

Traction Spur（牽引骨棘）とは、椎体の途中から突出する棘である。小さな棘が不安定さを示す所見である。変性の結果として発生する骨棘とは異なる。

何十万もの医師が、そのありふれた骨棘を見ていたが、誰一人として論文報告がなかった。Blood Supply（血液供給）は腰の後方手術での出血を観察し、出血の源である椎間関節間動脈を発見した論文である。こちらも腰の手術をした医師なら誰もが出血を体験しているはずなのに、誰からも報告がなかった。

「なぜMacnab氏だけに見えたのか？ どうやって歴史的な発見ができたのか？ それが知りたかった。なぜMacnab氏だけが機能的診断という手法で、手術で治らなかった神経根症状の原因を明らかにできたのか？」

菊地氏はトロント大学のMacnab教授に手紙を書いた。返信には「当方の医師には〝オリエンタル・ピープル〟はいない」とあった。

▲23歳、臨床実習（病院屋上）

▲中学卒業式

▲米沢市三友病院で研修

▲1990年、教授就任時

▲1993年、新しいGRAFの講習会

◀2003年、スウェーデン・イヨテボリ大学名誉医学博士号授与

めげずに「それでも行きたい」と書いた。返信は「では見学ならいい。ところでECFMG※は持っているか？」と。

「ECFMG？ 持っていないと書くと、disappointedと返信にあったんです。何だろうと調べると『失望した』という意味でした（笑）」

師がもし、弟子がdisappointedという単語さえ知らないことが分かったら、もっと失望しただろう。ECFMGは持っていなかったが、Researcherとして押し掛ける。アルバイトで貯めた200万円で半年は暮らせると考えた。だが英語の習得には相当苦労した。

後年、国際腰痛学会の会長職受諾演説で菊地氏はこう言った。

「Dr. Macnab changed my life, but unfortunately he could not change my poor English.」

人生を変えた私費留学を見ていこう。

## 熱意と愚直さで 臨床フェローの辞令獲得

留学の日課は、ウェールズリィ病院へ朝5時に行き、カルテを読むことから始まった。7時からは教授回診に付く。そして毎日必ず一つ英語で質問をした。

「当時、最新のマイクロカセット・レコーダーを日本から持って行きました。ところが後で聴いても分からない（笑）」

Macnab氏の英語にはスコットランド特有の訛りがあった。気の毒に思った教授の秘書が「シン、30分早く来い」と、4時半から英会話レッスン。テープ起こしも手伝ってくれた。その時のテープから起こしたQ&Aは今も財産として菊地氏の手元にある。

臨床が無い水曜日の午後は大学の研究施設

※ Educational Commission for Foreign Medical Graduates
米国医師臨床留学のための資格

◀Dr. Ian Macnab（Wellesley hospital, Toronto, Canada）菊地氏の人生を決定付けた留学先の恩師

▲蓮江光男氏（福島医大・日赤医療センター）整形外科の道に入る切っ掛けを作り、国際交流の重要性を教えた日本での恩師

Banting Instituteで解剖と犬の実験を行った。

「留学して半年のこと。ボスが『息子の解剖実習の準備を手伝ってほしい』と言いました。10人以上のフェロー達は『Yes, Sir !』と威勢がよかった。私ももちろん二つ返事でした」

カナダの教育に、生物の授業でトロント大学解剖学教室の解剖を見る実習がある。Macnab氏には当時中学生の息子がいて、その準備をしてほしいと頼まれていた。返事は良かったが解剖教室に行っても誰も来ない。英語の聴き間違えかと訝しんだが、当日、フェロー全員は協力したかのように勢揃いしていた。準備を担当した主任技師が教授に囁いた。

「ドクター・キクチだけが我々を手伝ってくれました」

感激した教授は翌日、菊地氏を呼んだ。「It's for you」と言って手渡したのは「臨床研究員」（Clinical Research Fellow）の辞令だった。

「出会いは単なる衝突ではなく、自分が求めようとする熱意と、それを受け止める相手の熱意があって初めて成立する。つまり人生の扉は他人が拓くのです」

海を渡った菊地氏は、熱意と愚直さがあれば人に受け入れられることを学んだ。この二つは彼に「内側から見ること」を導く。

## 指導医なしにひたむきに 10年間で400体の解剖

「痛み」は彼の原点でありライフワークである。卒業の際、痛みに取り組むのに物療内科に進むか整形外科に進むか悩んだ。そして、もし蓮江光男氏が颯爽たる助教授として福島医大にいなければ整形外科を選ばなかった。

だが整形外科医にとって痛みを治すとはどういうことなのか。彼はそれを「疑問を一つひとつ解決していったロードマップ」と著書『腰痛』（第一版）に書いた。

「留学前には、ひたすら切断肢から切片を作って、阻血性変化を見る研究をしました」

教室から追放され指導医のいない身で、一人でできることは解剖だけであった。切断肢の切片観察を通じた阻血性変化の研究は、後にMacnab氏が施した「引用文以外すべて赤ペン」の修正を経て、論文「Ischemic contracture in the lower limb」（Clin Orthop Relat Res.1978）となった。これを足がかりに留学先で、硬膜外造影剤や硬膜外ブロックの局麻剤の行き先を探る実験と、腰仙椎や頸椎の解剖を手掛けた。留学前後の10年間で400体以上に及ぶ解剖経験から、新たな疑問が芽生えた。

「ただ形態からだけで腰痛を理解するのは無理がある。逆に症状から形態を見ていくと腰痛の理解が深まりました」

解剖と手術で何千という脊柱管を見たことで、形態と症状を代わる代わる見る目をもった。それが「神経根ブロック評価による分岐神経の発見業績」や、治療手段としての「選択的脊髄動脈造影」、「交感神経節ブロック」の開発につながる。だが形態を見ても痛みがどこから来るか分からないものが残る。

「例えば腰部脊柱管狭窄で足に痛みが出たり痺れる。それは形態から障害が分かりますからブロックなど保存療法や手術療法をします。ところが腰だけ痛い人がいる。原因は腰にある。でもどうして痛いのかと聞かれても答えられない」

## 患者の「痛み」ではなく 痛みをもった「患者」を診る

症状を探ってから形態を見ると腰痛が分かってきた。神経根ブロックでも取れない症状があるという気づきから「神経性間欠跛行の分類の発見」が生まれた。そして菊地氏の視点を一段上げたのが、Macnab氏の言葉だった。

〝痛みを見る時には、患者の痛みを見るのではなく、痛みをもった患者を見なさい〟

Macnab氏の著書『Backache』（腰痛）には、医師と患者が延々と対話するくだりがある。普通の問診の域を超えて、日常生活や趣味に至るまで、痛みの来歴に迫る対話である。40年前から社会的なストレスや心理的な圧迫が、腰痛の発症や慢性化に影響を与えると見抜いていた。後年、Macnab氏の考えは、菊地氏らによって「生物・心理・社会的疼痛症候群」と提唱されて世界スタンダードになった。

「ストレスや社会的な地位、職場の問題、性格など心や環境が関係して腰痛を形成するこ

とが分かってきました。1996年から我が国で最初に精神科と共同で難治性腰痛の治療に対してリエゾン診療を開始しました。その中で認知行動療法を採り入れたのです」

彼に人の中から痛みを見ることを教えた。

## 多くの解剖の末に手に入れた脊柱を内側から見る目

「ある時突然、背骨の中に入って、背骨を内側から見ている感覚を持てるようになり、それから手術時間が抜群に短くなりました」

多くの解剖を手掛けた末に得たという脊柱を内側から見る目。菊地医師の手技は鋭(えい)匙(ひ)、鑿(のみ)、ケリソンパンチだけを駆使する。頸椎の手術では、エアドリルはスチールバーだけでやる。ときに荒っぽくて怖いとさえ言われる。

「削られる側から見ているから、この辺りまで来たら次にどうすればよいか分かる。見えているから安全なんです」

1983年の国際腰痛学会でのシンポジウムのテーマは「Pain and Nerve Root」（痛みと神経根）。ここで菊地氏は初めて国際会議に登壇し、留学の総決算となる発表を行った。

「英語もできない若造が、世界中の学者を前に発表するわけですから非常に緊張しました」

フロアから菊地氏に質問が矢継ぎ早に放たれた。その都度、Macnab氏が手を挙げて「今、ドクター・キクチが言いたいのはこういうことだ」と代弁してくれた。発表が終わると疲労困憊で、パーティーをキャンセル、ホテルの部屋で寝ていた。後でこう聞かされた。

「パーティーでMacnab氏が『Where is my son？』と私を探していたというのです」

探していたのは師だけではなく、彼を絶望に突き落とした福島医大もそうだった。菊地氏は少しずつ「人の痛みからの改革者」となっていく。

## へき地病院を1年で黒字転換 1日200人の外来患者

1986年、当時の福島県立医大の学長から菊地氏は万年赤字の奥会津にある小さな福島県立田島病院の建て直しを請われた。本来、医大の整形外科から院長を出すべきだったが、自治会による医局運営を依然引きずっていて、出すことができなかった。

「へき地の67床ほどの小さな病院です。整形外科には入院患者はおらず、外来患者も2、3人だけ。看護師さんに『明日はきっと来ますよ』と慰められました」

院長として赴任すると、宿舎もなく病室に寝泊まりするありさまだった。手術室も無かった。患者がいたとしても受付のカーテンは午後5時には閉じられた。

菊地氏はまず当たり前のことから始める。

「朝も昼も夜帰る前も回診です。患者さんが来たら起立して『お待たせしました』、『おはようございます』、帰りには『お大事に。何かあったら御電話をください』と挨拶。ベッドから寝起きする時は手を添える。スリッパも揃える。倉庫を改造し殺菌灯を取り付け手術室に仕立て、術後は病院に泊まり、手術の経験の無い看護師と一緒に体位変換をしました」

当時の片腕の紺野愼一氏（現福島医大整形外科教授）はこう書いた。

〝1日200人以上の患者さんが外来で溢れ、病棟も満床になり、3000万円の赤字病院がたった1年で1億数千万円の黒字となった。菊地先生のやったことは「時間を守る」「挨拶をする」「服装を整える」の3点。朝昼晩の回診、検査結果の迅速な説明と極めて単純なことでした〟

菊地氏が忘れられない患者がいる。長年座骨神経痛を患った老婆だ。その痛みは硬膜外ブロック注射で劇的に消えた。感謝した老婆は一週間後、病院に来て新聞紙の包みを菊地氏に手渡す。開けると山芋が入っていた。自分の山に行き腰をかがめて掘ったものをわざわざ持って来た。心と心が開かれて重なった。

## 除名された福島医大へ帰還 〝恨みは忘れる、反骨は忘れない〟

1年半で田島病院の改革を終え、いよいよ本丸への帰還である。大学に戻りいまだに自治会に縛られていた教室員に迫った。

「自治会は解散せよ。辞められないなら医局を辞めろ」

除名から十数年、菊地氏を追った先輩がまだ残っていた。彼らに過去と決別せよと奮起を促した。それは自らへの戒めでもあった。

〝人は許せ、でもその事実は決して忘れるな〟

恨みは忘れろ、だが怒りや反骨は忘れるな。人の成長にどちらも必要な要素だからだ。意

PROFILE

……きくち・しんいち

| | |
|---|---|
| 1971年 | 福島県立医科大学 卒業 |
| | 福島県立医科大学附属病院整形外科 入局 |
| 1977年 | 大阪市立大学脳神経外科 留学 |
| | カナダ・トロント大学ウェールズリィ病院 留学 |
| 1980年 | 日本赤十字社医療センター整形外科 副部長 |
| 1986年 | 福島県立田島病院 院長 |
| | 福島県立医科大学附属病院整形外科 助教授兼任 |
| 1988年 | 福島県立医科大学附属病院整形外科 講師 |
| 1990～2006年 | 福島県立医科大学附属病院整形外科 教授 |
| 2004～2006年 | 福島県立医科大学医学部附属病院 医学部長 |
| | 福島県立医科大学大学院医学研究科長 |
| 2006年 | 福島県医師派遣調整監 |
| | 公立大学法人 福島県立医科大学 副理事長（医療担当）兼附属病院長 |
| 2008年 | 公立大学法人 福島県立医科大学 理事長兼学長 |

気に感じた医局員は自治会を抜け、退職者は一人も出なかった。次は疲弊した教室を世界一の脊椎のメッカにする挑戦だった。

## そして医学部長、学長へ 「福島の悲劇を奇跡に変えよう」

「医局員全員にテーマを与えて、一緒に研究をしました。全ての手術に入り、6枚1組の腰のレントゲン1500例を一緒に見ました」

学会発表もなく学位取得者もゼロだった教室は、国際腰痛学会で演題数でも採用率でも世界トップとなっていた。その間に医学部長、理事長兼学長へと上った。

だが、〝あがり〟のはずの役割は、東日本大震災によって現場に戻された。

「震災後、住民は医大病院に押し寄せ、教職員は動揺していました。そこで毎朝毎晩と全職員を集めた全学ミーティングを開いた。情報を全て共有して不安をなくすためです」

菊地学長のこの姿勢は、彼が病院でしてきた「朝晩の回診」と「患者の話を聴く」と同じ。除染や健康被害、医療従事者の減少という問題に晒されながら、診断を具体的に与えた。

「誰にも相談せずに『皆さんの健康は数世代にわたって守っていきます、福島の悲劇を奇跡に変えよう』と記者会見を開きました。希望を失ったら総崩れになりますから」

患者との対話で培われた痛みを見る目がある。県の健康指標が全国最下位となり、高血圧や糖尿病患者も増え、自殺率もトップ。そこで原発事故という病巣すなわち形態からではなく、より大きな視点から痛みを見たのだ。

「福島で起きたことは5年後、10年後の日本の姿です。高齢化や過疎、社会動態の変化に対応するため、200万人の県民の情報共有から始める。患者を待つ医療ではなく、医療と介護の関係者が患者の中に入っていく。その最前線が、健康管理・先端臨床・産業連携を医療面から長期的に支える『ふくしま国際医療科学センター』なのです」

## メスと薬を取った後の残りは 「察する心」

医療者、改革者、リーダーとして、どれも桁外れの業績はどこから生まれてきたのか。

「先生からメスと薬を取ったら何が残りますか？」と原点の質問を投げかけてみた。

即座に答えが返された。

「心です、察する心」

痛みを人の内側から察する。それが優しき鉄人の正体だった。香りと花で人を包むもてなしが自然体でできる理由だった。

父の心を察して整形外科医になった。痛みという苦しみをテーマにした。形態からだけでなく、症状からだけでもなく、心から環境からも痛みを明らかにしてきた。メスを揮う手技は何人も寄せ付けない高みだが、むしろ患者への心配りの診察に力を注いだ。そして世界でも希有な痛みを抱えた地で、痛みを希望に変えるリーダーとなった。

我々こそ感謝の手紙を菊地氏に贈ろう。山芋のような素朴な感謝を抱えきれないほど。